カトリック復興期のヒューマニスト、フランチェスコ・セルドナーティ

根占　献一

(1)

本論は、16世紀フィレンツェのヒューマニスト（人文学者）、フランチェスコ・セルドナーティ（Francesco Serdonati）の覚え書を作成しようとするものである。彼の業績は自作と翻訳書から知られる。その出版・印刷を多く手がけた業者は、著名なジュンティ（Giunti）一族であった。セルドナーティの仕事から時代の文化を垣間見ることができるであろう。管見の限り、欧米にもセルドナーティの研究論文はなく、おそらくこれが初めてのモノグラフィである。ただ、彼に関わる文献史料は少なく、またそれが稀書の部類に入って未見のものも多いがゆえに、拙稿はささやかな試論に留まるであろう。

主にフィレンツェで活躍した、同時代の知識人たちを思い出すままに挙げると、著名なヒューマニストたちにピエル・ヴェットーリ（Pier Vettori. 1499-1585）、ベネデット・ヴァルキ（Benedetto Varchi. 1503-1565）、コジモ・バルトーリ（Cosimo Bartoli. 1503-1572）、ヴィンチェンツォ・ボルギーニ（Vincenzo Borghini. 1515-1580）、ピエトロ・アンジェリ・ダ・バルガ（Pietro Angeli da Barga. 通称イル・バルジェオil Bargeo. 1517-1596）が、また個性的な著述家たちにアントン・フランチェスコ・グラッツィーニ（Anton Francesco Grazzini. 1503-84）やヴィンチェンツォ・ガリレオ（Vincenzo Galileo. c.1520-1591）たちがいる。彼らに比べれば、セルドナーティはより若い世代に属し、同世紀を越えて17世紀初めまで生きた。

だが、今日ではほぼ忘れ去られていよう。生年はフィレンツェ歴1539年、今日の暦では1540年の1月7日で、没年は定かでない。生地はトスカーナ、ラモレ（Lamole）[1]とす

[1] *Dizionario biografico degli Italiani*, Roma, 1960- は続刊中で67巻まで達しているが、まだセルドナーティの項目には届いていない。*The New Century Italian Renaissance Encyclopedia*, ed. Catherine B. Avery,New York, 1972, 861 では1540年1月7日 トスカーナのレモレLemole（sic）で生まれ、1602年以降、ローマで死去とある。セルドナーティの以下の書、『トルコ人の慣習と彼らとの戦闘方法』*Costumi de' turchi e modo di guerreggiarli. Ragionamento inedito*, Faenza, 1853, 7-9(avvertimento dell'editore)では1550年頃生まれ、1615年頃亡くなったと、『第216代ローマ教皇インノケンティウス8世の生涯と事績録』(*Vita e fatti d'Innocenzo VIII papa CCXVI*), III(prefazione dell'editore)でも、1550年頃フィレンツェで生まれたとある。以下の註10、28も参照のこと。

る書もあれば、フィレンツェ市内のサン・ジョヴァンニ市区リオン・ドーロ地区生まれとする指摘もある。こちらの指摘にさらに従えば、最後の記録（memoria）はフィレンツェの1609年で、その後ローマで亡くなったらしく、1611年までここで書簡を執筆した、と。また1872年に、後述の請願書とセルドナーティの書簡集が公けにされたとあるが、未確認である[2]。

先祖が地方の出であったことは間違いなく、そのために200人会（Consiglio dei CC）へ税の減免を求める、1583年9月22日の請願書（supplica）が存在する。これから、父ベネデットや祖父ニッコロの名が知られる[3]。そこに、フランチェスコ・ディ・ベネデット・ディ・ニッコロ・セルドーナティ・ダ・ラモレ（Francesco di Benedetto di Niccolò Serdonati da Lamole）とあるからである。パドヴァ、ついでラウジァ（Raugia）に住んだことがあったが、この時、すでにフィレンツェに長年暮らして、自宅と妻子があり、文法と人文学の公立学校（scuola pub.ca di gramatica et umanità）で生計を立てている。フランチェスコ・セルドナーティは、「自らの祖国に選んだこの高貴この上ない都市で生き、かつ死すことを、またトスカーナ大公閣下の少年たちや若者たちに文学と美俗（lettere et buon costumi）を教えることを望んでいる」ので、件の処置を求めたのであった。投票の結果、195票（黒豆）の圧倒的賛成票を得ている[4]。

(2)

著名でなくとも、私の関心を惹きつけて離さぬ理由は、ひとつには彼がヒューマニストのあり方を示していること、もうひとつには日本の歴史と小さからぬ繋がりを有していることにある。ルネサンスのヒューマニストは弁論としてのレトリックが発揮できる誇示演説を好んだが、彼にもこの方面の追悼演説が二本（1590年と1593年）残されている。またヒューマニストは決して文筆一本で生きているわけでなく、通常一定の職に就いていた。彼が教師であったことは、先の史料から明らかである。ヒューマニストは一般的に、総じて外国語のギリシア語作品をラテン語に翻訳したり、自らの作品はラテン

---

[2] *Proverbi inediti di Francesco Serdonati aggiuntovi una supplica dello stesso al consiglio dei CC*, Padova 1873. Pietro Ferrato編のこの書のp.6の註参照。編者はここで公刊はGaetano Milanesiに負うと感謝している。ミラネージはジョルジョ・ヴァザーリの列伝編者として高名な学者である。フェッラートによる公刊書は以下のとおり。*Lettere inedite di Francesco Serdonati tratte dal R. Archivio in Firenze*, Padova, 1873. この情報は、註9にあるフランコ・ボナッティの論文による。

[3] Consiglio dei 200. Filza 15 delle suppliche dal 1582 al 1586 a c. 33-1583, 22 settembre, Archivio di stato in Firenze, in *Proverbi inediti*, 5-6 に所収.

[4] *Ibid.*,5-6. ラウジァについては『トルコ人の慣習と彼らとの戦闘方法』のドン・ジョヴァンニ・メディチあての献辞で、「あのころ私はラウジァにいた」と書いている。Serdonati, *Costumi de' turchi e modo di guerreggiarli. Ragionamento inedito*, 11.

語で執筆したりした学者として捉えられている。

だが、古典だけでなく、同時代のラテン語作品を俗語に訳出した業績や、また自作を俗語で物した面は無視されがちである。問題のセルドナーティはこのような人物であった。そのような訳業の大仕事に、ベルガモ出身のイエズス会士ジョヴァンニ・ピエトロ・マッフェイ（Giovanni Pietro Maffei. 1535-1603）の『インディア（インド）史全16書』（*Historiarum Indicarum libri XVI*）がある。初版は1588年で、フィレンツェのフィリッポ・ジュンティ（Filippo Giunti. 1533-1600）により印刷された。以後、種々の版がヨーロッパ各地で刊行され、その内容が世に広まった。マッフェイはこれより早く、1585年に同会の祖師、イグナティオ・デ・ロヨラ伝をローマで刊行し、時の同会総長（Praepositus generali societatis Jesu）クラウディオ・アクワヴィーヴァ（Claudio Acquaviva. 1543-1615）に捧げた。ジュンティ版にはこれらが合作されて印行され、スペイン国王フェリペ2世に献呈されたのである。これにはさらに、マッフェイがポルトガル語から訳したフランシスコ·ザビエルの書簡なども含まれていた[5]。

この版は直ちに翌年、セルドナーティにより翻訳出版される。出版社は同じくジュンティであった。彼の書籍と関わりの深い出版業者ジュンティは、このようにイエズス会関係の書籍を数多くたくさん世に送り出した。ただしこの翻訳版にはデ・ロヨラ伝はない。つまりこれは翻訳されなかった。セルドナーティが訳して公刊したのは、『インディア史』と書簡集であった[6]。このため、この訳書はアジアと日本が中心であり、その地域事情が細かく述べられている感を与える。セルドナーティの時代には、日本、ジパングはヨーロッパ人にもはや未踏の島国でなく、またこのヨーロッパに日本の使節も最初の画期的な足跡を残し、夥しい記録が残されたのである。セルドナーティが1585年、フィレンツェもしくは別のイタリアの地で天正遣欧使節を見かけた可能性は低くない。一行はイタリア各地でたいへんな話題となっていた[7]。

---

[5] マッフェイに関しては、根占献一「イタリア人の訪問者・熟知者と日本—鹿児島調査旅行覚書」『学習院女子大学紀要』第7号（2005年）、25-42、特に37頁。*I Giunti tipografi editori di Firenze, 1571-1625. Annali inediti con un'appendice sui bibliografi dei Giunti*, a cura di Luigi Silvestro Camerini, Firenze, 1979, 91-92. ジュンティ一族に関しては、William A. Pettas, *The Giunti of Florence. Merchant Publishers of the Sixteenth Century*, San Francisco, 1980.

[6] Prospero Peragallo, Cenni intorno alla colonia italiana in Portogallo nei secoli XIV, XV, XVI, in *Miscellanea di storia italiana*, Torino, S. III, T. IX(1904), 379(1)-462(84): 417(39). *I Giunti tipografi editori di Firenze*, 1571-1625, 93-94.

[7] Adriana Boscaro, *Sixteenth Century European Printed Works on the First Japanese Mission to Europe. A Descriptive Bibliography*, Leiden, 1973. その余韻はいつまでも残り、たとえばジュゼッペ・マリア・メカッティの『都市国家フィレンツェの編年史』は、もっぱら使節一行の動向に同年の記述を割いている。Giuseppe Maria Mecatti, *Storia cronologica della città di Firenze*, Napoli, 1755, parte seconda, 767-768. これについては、根占献一『東西ルネサンスの邂逅—南蛮と禰寝氏の歴史的世界を求めて』東信堂、1998年、120-164、特に140頁を参照のこと。

同時代作品の翻訳はマッフェイに限るものではない。歴史書の校訂では、ポッジョ・ブラッチョリーニ（Poggio Bracciolini. 1380-1459）の『フィレンツェ史』（*Historia florentina*）がある。このラテン語版がヴェネツィアで印刷されて世に出たのは遅く、1715年のことであった。ただ、その子ヤコポ（Jacopo. 1441-1478）の俗語訳のほうはしばしば印刷に付され、1598（1599）年にはジュンティよりセルドナーティの校訂版が出た。この時、セルドナーティはラテン語で書かれた父の書と子の訳文を校合し[8]、すでに存在する訳書をある意味では仕上げたわけである。

彼が関わった国史の訳はフィレンツェ共和国に限らなかった。ウベルト・フォリエッタ（Uberto Foglietta. c.1518-1581）の『ジェノヴァ史全12巻』（*Historiae genuensis libri XII*）の純然たる翻訳が挙げられよう。地元ジェノヴァで、俗語訳は1597年に公刊されたが、ラテン語原書は1585年にウベルト弟パオロにより印刷に付されていた。このフォリエッタ兄弟はセルドナーティの後援者、アルベリコ・チーボ（Alberico Cyboもしくはアルベルト・チーボAlberto Ciboとも。1532-1623）と親しい関係にあった。アルベリコは『ジェノヴァ史』公刊に並々ならぬ関心を抱いていたが[9]、彼とセルドナーティとの繋がりについては、あとで少しく述べることになろう。

また、ボッカッチョ（Boccaccio. 1313-1375）やピエトロ・アンジェリ・ダ・バルガの訳に関しては、同じく自作の項で後述する。これらはともにジュンティより、各々1598年と1611年に出た。後述の理由は、ボッカッチョにはセルドナーティのオリジナル作品も含まれるためであり、イル・バルジェオの場合は19世紀の新版にオリジナル作品とともに合作されているがためである。

この二人、ボッカッチョとイル・バルジェオが生きた世紀間の人物で、ヨーロッパ各地を旅し、ハンガリーで活躍したガレオット・マルツィオ・ダ・ナルニ（Galeotto Marzio da Narni. 1427-c.1497）には、興味深い諸論文が存在する[10]。そしてその一本はセルドナーティの訳により、やはりジュンティから『さまざまな学説』（*Della varia*

---

[8] *I Giunti tipografi editori di Firenze*, 1571-1625, 132.

[9] F. Bonatti, Alberico Cybo e i letterati del suo tmpo, in *Il tempo di Alberico 1553-1623. Alberico I Cybo-Malaspina: Signore, politico e mecenate a Massa e a Carrara*, 1991, 233-249:240. Guido Manacorda, *Petrus Angelius Bargaeus*(Piero Angeli da Barga), Pisa, 1904,17 によると、1567年イル・バルジェオにジェノヴァ史（la storia del Genovesato）の依頼があった。

[10] P. O. Kristeller, Nuove fonti per la storia dell'umanesimo italiano, in id., *Studies in Renaissance Thought and Letters*, Roma, 1969(1953), 373-394, 特に375-377, 393. Federico Gabotto, *Vita di Giorgio Merula*, Alessandria, 1893, 26n. によると、『さまざまな学説』（本文参照）には、セルドナーティ作の『ガレオット・マルツィオ・ダ・ナルニ伝』（*Vita di G. M. da Narni*）が序として付いているという。ただガボットは1615年刊行としている。現段階ではこの版も1595年版も未見だが、後者はネット上でフィレンツェ国立図書館を介して、表紙、献辞の最初の頁、コロフォンの三葉を見ることができる。なおここではセルドナーティの没年は1603年とあるが、マルツィオは1442年生まれで1494年没とあり、大いに異なる。

dottrina）と題されて、1595年に出た。ラテン語版（*De doctrina promiscua*）のほうは、逸早く1548年にトォレンティーノ印刷より出ていた[11]。トォレンティーノ（Torrentino）もフィレンツェで出版業を営む、有名な一族で、メディチ（大）公と縁が深かった。マルツィオはパドヴァ大学で医学を学んだヒューマニストだけに、この書にはその知識が活かされている。セルドナーティは、これに「マッサの君主、神聖ローマ帝国の領主にして私の常に尊敬せるパトロン」アルベリコ・チーボあての長文の献辞を添え、また簡単な註を施した[12]。

(3)

彼によるこのような当代作品—ボッカッチョは彼より200年以上前の人であるものの—の現代語訳に対して、古典の訳で有名なのは、セネカの『怒りについて』（*De ira* [*Dell'ira*]）であろう。研究者ボルガーによると、それは1569年のことである[13]。当たりをつけ、この時代のジュンティの出版目録を参照したが[14]、見出せなかった。したがってこの版は未見である。もしかしたら、印刷に付されていないのかも知れない。フェッラーラのイエズス会士ジュリオ・ネグリの18世紀の遺作、著作家伝に、セルドナーティの記述、略歴と出版活動はあるものの、この翻訳には言及がない[15]。

ミラノの出版社ダエッリ（Daelli）の稀覯本叢書（Collana: Biblioteca Rara Daelli）に、セルドナーティによるセネカの訳書が入ったのは、19世紀半ば過ぎのことである。このとき、14世紀に俗語訳された『パウロ＝セネカ往復書簡』（*Epistulae Senecae ad Paulum et Pauli ad Senecam*）も同じ巻に収録された[16]。この叢書には、興味深いことに『三人の

---

[11] Domenico Moreni, *Annali della tipografia fiorentina di Lorenzo Torrentino impressore ducale*, 1989(1819),Firenze, 33.

[12] *I Giunti tipografi editori di Firenze*, 1571-1625, 117. チーボ家は本論で後述するように、メディチ家と縁が深かった。またセルドナーティにはメディチ家も重要な後援者一族であった。コジモ一世の息でトスカーナ大公フェルディナンド一世と彼の文筆活動との関係を伝える一例は、Giovanni Cipriani, *Il mito etrusco nel rinascimento fioretino*, Firenze, 1980, 206n.

[13] R.R.Bolgar, *The Classical Heritage and its Beneficiaries*, Cambridge, 1973(1954), 535. *Ibid.*, 506 によれば、情報はArgellati, *Biblioteca degli volgarizzatori*, Milano, 1767 に依拠している。目下、この書物で確認が取れていない。

[14] *I Giunti tipografi editori di Firenze 1497-1570 Annali*, a cura di D. Decia, R. Delfiol e L.S. Camerini, Firenze, 1978.

[15] P. Giulio Negri, *Istoria degli scrittori fiorentini*, Ferrara, 1722 (Bologna, 1973), 221.

[16] *Dell'ira libri tre di Lucio Anneo Seneca tradotti ed annotati da Francesco Serdonati nuovamente ridotti a miglior lezione coll'aggiunta delle lettere di S. Paolo a Seneca e di Seneca a S. Paolo volgaizzate nel secolo XIV*, Milano, 1863, 155-168に往復書簡が所収されている。そこでの表題は以下の註20にあるとおりである。書誌情報によれば、近年、これは復刻(Arnaldo Forni, Bologna, 1974.)された。

詐欺師』(*De tribus impostoribus* (*MDIIC*)) も収められている[17]。私が眼を通したのは、1864年に出たこれと、先の『怒りについて』などが合本された、旧蔵書家の手から離れた古書である。

『怒りについて』の中世写本には第1巻第2章に脱落があった。本書でも脱文のままである[18]。このことは、マルク・アントワーヌ・ミュレ (Marc-Antoine Muret. ラテン名ムレトゥスMuretus. 1526-1585) により初めてその可能性が指摘された。フランスはリモージュ近郊、ミュレ出身のヒューマニストであるが、その主要な活動舞台はイタリア、特にローマといっていい[19]。セルドナーティのイタリア語訳文は読みやすく、ローマの哲学者の真意をよく伝えている。そしてその基調のみからも、後世の人々がこの哲人とキリスト者の間にきずなを求めたことも、無理からぬように思われる。同書第2巻第28章などはその好例であろう。その冒頭に「万般に関して公平な審判人であろうと望むなら、まず最初にわれわれは、こう確信しようではないか。われわれのうち、罪のない者は一人としていない、と。」とある。

彼らの関係は、ヒエロニュムスの4世紀からイタリア・ルネサンスの盛期、15世紀まで信じられ続けた。この聖人によれば、セネカはペテロとパウロが殉教の栄に浴する2年前に、ローマ皇帝ネロから死を賜った[20]。それは65年のことである。セネカと彼ら使徒との歴史的関係を示すものは存在しないのだが、その長兄でアカイア総督ノウァートゥスはこれ以前、52年に、ユダヤ人たちにより法廷に訴えられたパウロを法の番人として間近に見る機会があった。このことは『新約聖書』の『使徒行伝』(第18章12－17) がかなり詳しく伝えている。

セネカはいわば「隠れキリシタン」或いは「ニコデモス主義者」として人々に映じていたのだが、往復書簡はデシデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus. 1466～69-1536) の徹底的批判に遭った。同時代のヒューマニストのなかには、史料批判を差し控えるルフェーヴル・デタープル (Lefèvre d'Ètaples. c.1455-1536) のような人もいた[21]。かなりのちの世代のセルドナーティが両者の関係を、また時代の文献批判をどのように見ていたのか、現研究段階では判然としなかった。16世紀後半のヒューマニストであるから、単純にはエラスムス以前の見方をもはや共有しえなかったのではなかろうか。む

---

[17] 『三人の詐欺師』の史的意義は別稿を期す予定である。

[18] 邦語版『セネカ哲学全集1倫理論集(Moralia)』(岩波書店、2005年)所収の『怒りについて』(邦訳兼利琢也)では、補って和訳してある。

[19] C. Dejob, *Marc-Antoine Muret; un professeur français en Italie*, Genève, Slatkine Reprints, 1970(1881).

[20] *L'Epistole di Seneca a S. Paolo e di S. Paolo a Seneca volgarizzate nel secolo XIV*, 157にヒエロニュムスの証言とセネカの墓碑銘が載っている。

[21] Guy Bedouelle, *Lefèvre d'Ètaples et l'intelligence des Ecritures*, Genève, 1976, 205.

しろここでは、彼の翻訳を利用しながら、偽作の書簡集を含ませる、19世紀の編集者の意図に思いを馳せるべきであろう。

(4)

つぎにセルドナーティ自らの主要著作を一瞥してみよう。注目すべき一書は『第216代ローマ教皇インノケンティウス8世の生涯と事績録』(*Vita e fatti d'Innocenzo VIII papa CCXVI*) である。同本文末尾に1595年に執筆されたとある。本論では1829年にミラノで印刷された版を用いる。これにはさらに、セルドナーティによるイル・バルジェオの俗語訳、短編の『ローマ史著述家読破順』(*Ordine di leggere gli scrittori della storia romana*) が添えられている[22]。こちらは前述した1611年に、パオロ・デ・ロッシ (Paolo de' Rossi, パオロ・デル・ロッソ Paolo del Rosso) によるスエトニウスの皇帝伝の翻訳と合わされて、ジュンティより出たことがあった[23]。

さて、『教皇インノケンティウス8世の生涯と事績録』の編者は序文[24]で、セルドナーティの文筆力を礼讃する。それによると、誰をもまねず、まったく自分の文体を形成している。これをセルドナーティは簡素な (文体) と称し、さらにはフィレンツェ俗語を記すことと宣しているとはいえ、その文体は優美であり、言語がよき世紀のきわめて著名な作家たちの言葉であることは、皆が一致している、と[25]。

翻訳者としては、マッフェイの『インディア史』に真っ先に言及している。ただし、書名が『西インディア (インド) 史』(*Storia delle Indie Occidentali*) とあり、『東インディア (インド) 史』(*Storia delle Indie Orientali*) とすべきなので間違っている。ただ興味深いことに、同じくミラノで1806年に出た、マッフェイ作でフィレンツェ市民セルドナーティ訳の『東インディア (インド) 史』(*Le storie dell'Indie Orientali,* Milano,1806,3 voll) に言及し、その見事な俗語文によりイタリア古典収攬に入るにこれが相応しいと判断されたという[26]。全3巻全体にこの表題が付けられているが、最初の2巻が『東インディア史』全16書を含み、最終巻には、同じくセルドナーティの手になるザビエルなどの書簡のイタリア語訳が4書にわたって収録されている。

---

[22] 全体としては*Vita e fatti d'Innocenzo VIII papa CCXVI scritta per M. Francesco Serdonati fiorentino coll'aggiunta dell'ordine di leggere gli scrittori della storia romana composto in latino per M.Pietro Angeli da Barga e fatto volgare dallo stesso Serdonati*, dalla tipografia di Vincenzo Ferrario, Milano, 1829. Manacorda, *op.cit.*, 118-119.

[23] *I Giunti tipografi editori di Firenze*, 1571-1625, 159.

[24] Prefazione dell'editore, iii-vii. 編者はその名が序文に出ないが、本書を印刷したヴィンチェンツォ・フェッラリオであろう。注22参照。

[25] *Ibid.*, iii.

[26] *Ibid.*, iii-iv.

その他の翻訳、チーボ家の依頼による既出のフォリエッタの『ジェノヴァ史』やイル・バルジェオの『ローマ史著述家読破順』の各俗語訳に触れ、これと未刊の『教皇インノケンティウス8世の生涯と事績録』を合わせて公刊する意義を指摘している。さらに、未刊の自作に三巻本の『フィレンツェ全俚諺の起源』(*Origine di tutti i proverbi fiorentini*) があることを、かなり詳しく記している[27]。

つぎにいよいよ本題に序文は進む。アルベリコ・チーボがマッサおよびカッラーラの君主国 (principato) の統治者であり、また学芸の保護者 (mecenate) であることが取り上げられる。われらのセルドナーティは君主の求めに応じて、またメチェナーテに対する感謝の気持もあって、インノケンティウス8世伝に筆を染めたとされる[28]。あとは公刊するだけであったが、今となっては定かならぬ理由により、手稿本のまま1806年まで眠っていた経緯が語られる。この年、フランス人たちの皇帝から同君主国を譲渡されたルッカ公妃は、ドゥカーレ宮を再建させる一方で、チーボ一族の古文書が保管されている部屋を壊し、手稿本が他の手書き本とともに人手に渡るままにした、と[29]。皇帝とはもちろんナポレオンであり、ルッカ公妃とはその妹エリーザ・バチョッキのことである。

インノケンティウス8世は1432年ジェノヴァに生まれ、1492年ローマで亡くなった。教皇としての在位は1484年から92年に及んでいる。本名はジョヴァンニ・バッティスタ・チーボ (Giovanni Battista Cibo) で、少なくとも二人の実父であり、これを認知した。息子のひとりフランチェスケット (Franceschetto) はロレンツォ・イル・マニフィコの次女マッダレーナ (Maddalena) と結婚した。1488年1月のことである。翌年3月9日、ロレンツォの次男ジョヴァンニを枢機卿にしたのは、縁戚となったこの教皇の配慮による[30]。ただし、14歳未満だったジョヴァンニは、3年間は実際の職務には就かないという条件が課せられていた。アルベリコはそのマッダレーナの孫筋である。父の名はロレンツォで、マッサ辺境伯の女と結婚することになる。

最後に、編者は『教皇インノケンティウス8世の生涯と事績録』でこの時代の簡潔な政治史の描写を行なう。その際、歴史家セルドナーティの文体が称えられる。そして、貴重な手稿本が編者によって寄贈されたミラノのブレラ図書館にあると結んで、序を終えている[31]。

---

[27] *Ibid.*, iv-v.

[28] Bonatti, *op.cit.*,241には教皇伝の執筆の経緯とねらいが指摘されている。なお同頁の註44で、ボナッティはセルドナーティが1540年にフィレンツェ近郊ラモレで生まれ、1611年にローマで死去したと書き、文献として、本論の註2に挙げたフェッラート編の書簡集を挙げている。

[29] Prefazione dell'editore, v-vi.

[30] 根占献一『ロレンツォ・デ・メディチ—ルネサンス期フィレンツェ社会における個人の形成』南窓社、1999年第2版、15、131、190頁。

[31] Prefazione dell'editore, vi-vii.

本文のなかで、セルドナーティはフランチェスケット（フランチェスコ）は教皇の息子と淡々と記す。他方でチーボ家とメディチ家の婚姻に対するロレンツォ・イル・マニフィコの気遣いは詳細に書き留め、彼の判断と深慮が皆の賛嘆を呼んだと記している[32]。教皇の意向により枢機卿に昇進させてもらった者を列挙するなかに13歳のジョヴァンニも挙がり、のちには教皇レオ10世となった、と認める。そしてこれによりメディチ家は偉大になり、「今日ほぼトスカーナ全域を治めている」という[33]。

学問・芸術のメチェナーテの側面に注目すると、教皇の傍らで第一級の画家アンドレア・マンテーニァ（Andrea Mantegna. 1431-1506）が仕事をしたと、面白い逸話とともに語っている。ベルヴェデーレ宮殿で多くの仕事をしたけれども、期待したほどの報酬を得られなかった。そこでマンテーニァはある人物像を描きこみ、それを覆っておいた。ある日やって来た教皇が訳を尋ねると、画家は被いを取って、「聖父様、これは分別像（la Discrezione）です」と即座に答えた。教皇は笑いながら、その傍らに忍耐を表わす別の人物像を描くがよいと応じた。作が完成すると、教皇は物惜しみなく支払いをした、という[34]。この逸話はヴァザーリも伝えている[35]。あるいはこの美術史家から引いてきている可能性が高いかも知れない。

学者としては、エルモラオ・バルバロ（Ermolao Barbaro.1453-1493）、ポリツィアーノ（Poliziano.1454-1954）、ポンターノ（Pontano. c.1422-1503）の名を挙げるが、その画家の場合と違い、具体的事実は示されていない。教皇が高い評価を与えていたと記すに留めている[36]。異端に厳格だった教皇とピーコ・デッラ・ミランドラ（Pico della Mirandola. 1463-1494）の事件には触れられていない。教皇は長身白皙で見事に調和が取れており、人好きのする、優しい姿形であることを強調し、全キリスト教徒に愛され、尊敬されたが、異教徒のトルコへの戦いは辞さなかったと語る[37]。トルコ関係の叙述は全体としてかなり詳しい。この国に関しては、セルドナーティの別の著作でいささか後述したい。

興味を惹くのは、ジェノヴァ人コロンボの新世界発見への言及である[38]。1492年秋の

[32] *Vita e fatti d'Innocenzo VIII papa* CCXVI *scritta per M. Francesco Serdonati fiorentino*, 59-61.

[33] *Ibid.*,96-97

[34] *Ibid.*, 81.

[35] Giorgio Vasari, *Le vite de' più eccellenti architetti, pittori, et scultori italiani, da Cimabue insino a'tempi nostri* nell'edizione per i tipi di Lorenzo Torrentino, Firenze, 1550, a cura di Luciano Bellosi e Aldo Rossi. Presentazione di Giovanni Previtali, Torino, 1986, 495. ここではヴァザーリはミラネージ版でなく、トォレンティーノ初版（1550年）を挙げる。註2参照。ヴァザーリ『ルネサンス画人伝』平川・小谷・田中訳、白水社、1982年、134頁

[36] *Vita e fatti d'Innocenzo VIII* ., 83.

[37] *Ibid.*, 89.

[38] *Ibid.*, 88

ことであり、教皇の死後の出来事であるが、同郷の人間の行なった快挙ゆえに記しているのであろうし、セルドナーティがいわゆる地理上の発見以後の世代に属していることの証左でもあろう。ヨーロッパ以外の地域への関心にも並々なるものがあったといえよう。先に記したように、そのなかにはアジア、極東の日本も当然含まれていたであろう[39]。

(5)

先述のように、『教皇インノケンティウス8世の生涯と事績録』にトルコの叙述が詳しいのは、セルドナーティ自身の関心と時代背景を如実に示していよう。彼には『トルコ人の慣習と彼らとの戦闘方法』(*Costumi de' turchi e modo di guerreggiarli. Ragionamento inedito di Mess. Francesco Serdonati tratto dall'autografo esistente nella Magliabechiana,* Faenza, 1853) という、決して長くはないが、興味津々の著述が存在する。また、レパント (Lepanto) の海戦 (1571年10月7日) に象徴されるような、切迫した対外関係をも考慮に入れておかなければならないだろう。これは若いときの彼には印象深い出来事だったのではなかろうか。ただ、この両著作ともほぼ同年作である。『教皇インノケンティウス8世の生涯と事績録』が1595年に執筆されたのに対し、『トルコ人の慣習と彼らとの戦闘方法』は1594年4月28日付けの、ドン・ジョヴァンニ・メディチ (Don Giovanni Medici. 1567-1621) あての献辞がついているからである。

ジョヴァンニ・メディチは祖父に黒旗隊長ジョヴァンニを、父に初代のトスカーナ大公コジモ一世を持ち、武人であるとともに、建築や文学などに多才な能力を発揮した興味深い人物であった[40]。同年、ジョヴァンニは神聖ローマ皇帝ルドルフ2世に軍人として仕え、ハンガリーで武勲を立てた。その後トルコとの戦いに際しては、皇帝は彼を砲兵隊長官 (Generale di artiglieria) に就けた。『トルコ人の慣習と彼らとの戦闘方法』はまた、歴史家としてのセルドナーティをよく示している。ギリシア・ローマの古典から戦争・戦術に関わる引用がふんだんにあるだけでなく[41]、中世やルネサンスからも具体的に戦闘の歴史とその結果を取り上げている。それは古今の隊長から模倣するに足る範例を提示して、ドン・ジョヴァンニに役立ってほしかったからである[42]。

トルコの情報はこの時代、少なからず書かれているが、セルドナーティの作品もその一点である。別人の手になるものを一作挙げておくと、彼の先輩格の大ヒューマニスト

---

[39] Cfr. Lucia Nadin Bassani, *Il poligrafo veneto Giuseppe Betussi*, Padova, 1992, 53.

[40] Gaetano Pieraccini, *La stirpe de' Medici di Cafaggiolo*, Firenze, 1986, II, 217-249.

[41] 未見であるが、次の両書は同類自書でないかと推測する。*L'imprese fatte da'Romani in Guerra*. In Venezia, 1572, *Fatti d'arme de'Romani*, Opuscolo. (Libri III. Ven. Ziletti e Comp., ma in fine Cristoforo Zanetti, 1572). Giulio Negri, *op.cit.*, 221. *Dell'ira libri tre di Lucio Anneo Seneca*, xiii-xiv.

[42] *Costumi de' turchi e modo di guerreggiarli. Ragionamento inedito*, 23,30-32.

でフィレンツェとも縁の深い、コーモ出身のノチェラ司教パオロ・ジョーヴィオ（Paolo Giovio. 1483-1552）に『トルコ事情註解』（*Commentario de le cose de' Turchi*）がある[43]。ジョーヴィオにはラテン語作品が圧倒的に多いが、これは俗語で執筆され、以後、幾度となく印刷され、広く親しまれた。セルドナーティも当然知っていたであろう。ジョーヴィオの場合は英傑好みの彼らしく、スルタンたちに関心があったように思われる。時の神聖ローマ帝国皇帝カロルス（カール）5世（Carolus V. 1500－1558）あての献呈の辞（1531年1月22日付け）は、書き下ろし時期の政治状況をよく伝えている。ラテン語に訳したのはフランチェスコ・ネグリ（Francesco Negri）で、1537年ヴィッテンベルクでこの版の初版が出、翌年にはアントウェルペン、パリと続いた。ドイツ語訳はルター派のユストゥス・ヨナス（Justus Jonas. 1493-1555）の手になるが、それにはフィリップ・メランヒトン（Philipp Melanchton. 1497-1560）が序文を寄せた。トルコの軍事力問題はヨーロッパ人にとり、宗派とは関係ない切実な死活問題であった[44]。その脅威は、セルドナーティ時代にも続いていた。

そのほかのセルドナーティの著作に触れると、『俚諺集』（*Proverbi*）がある。この書も生前に出版されることはなく、19世紀後半に漸く出た[45]。そのなかから、14世紀ルッカの皇帝派領袖カストルッチョ・カストラカーニ（Castruccio Castracani. 1281-1328）に纏わる、比較的よく知られた言葉、「カストルッチョが言ったことには—彼は神が欲する者であり、神が欲するであろう者になるであろう」（Come disse Castruccio: Egli è quel che Dio vuole e sarà quel che Dio vorrà.）をひとつ紹介しよう。この言葉に次いで、セルドナーティは短文の冒頭に、「神のうちにすべての事柄の結末が存し、すべてが彼の意思に依存する」と書いている。警句の最後に、ジョヴァンニ・デッラ・カーサ（Giovanni della Casa. 1503-1556）の『ガラテーオ』（*Galateo*. 1558年初版）がその言葉を引用している、と結んでいる。そこでこの有名な書を見ると、デッラ・カーサは、カストルッチョがこれらの言葉を衣装に縫いこんでいたが、それは身分上相応しくなく、彼のトランペット兵（trombetto）に似つかわしいとしている。セルドナーティの文ではtamburino（鼓手）とある[46]。

[43] Giovio, *Commentario de le cose de' Turchi,* a cura di Lara Michelacci, Bologna, 2005. T.C. Price Zimmermann, *Paolo Giovio. The Historian and the Crisis of Sixteenth-Century Italy*, Princeton, 1995, 121.

[44] エラスムスに関しては、Lara Michelacci, *Giovio in Parnasso. Tra collezione di forme e storia universale*, Bologna, 2004, 191-193.

[45] 註2に既出だが、今一度記すと、*Proverbi inediti di Francesco Serdonati aggiuntovi una supplica dello stesso al consiglio dei CC.*, Padova, 1873.

[46] *Ibid.*, 8. デッラ・カーサ『ガラテーオ。よいたしなみの本』池田廉訳、春秋社、1961、176頁参照。Giovanni della Casa, *Prose, e altri trattatisti cinquecenteschi del comportamento*, a cura di Arnaldo di Benedetto, Torino, 1970, 268. Cfr. Giovanni Villani, *Cronica*, a cura di Franc. Gherardini Dragomanni, tomo III, Firenze, 1845, 57（Libro decimo, capitolo LIX）.

このような書物の体裁で思い出されるのは、ポリツィアーノの『お気に入り金言』(*Detti piacevoli*) やロドヴィーコ・グィチァルディーニ (Lodovico Guicciardini. 1521-1589) の『気晴らし時間』(*Ore di ricreazione*) であろう[47]。これらはヒューマニストたちが折々の機会に会話や談論を弾ませるために書き留めておいたことに由来するのであろう。

最後に、セルドナーティとボッカッチョ作品の関係に触れておきたい。ボッカッチョのラテン語著作二点、『著名婦人』(*De mulieribus claris*) と『著名人の運命』(*De casibus virorum illustrium*) は、ヴェネツィアのジョリト (Giolito) 出版社などで仕事をした文学者、ジュゼッペ・ベトゥッシ (Giuseppe Betussi. c.1512-c.1573) により俗語に訳されていた。ベトゥッシは所謂雑文家 (poligrafo) の一人として知られている。当時ヴェネツィアはイタリア随一の出版地であり、このような「筆(ペン)の冒険家」を多く抱えていた。セルドナーティは原作にさらに幾人かの事例を付加し、また時代的な磨きをかけ、ジュンティ出版社より出した。各々1596年と98年のことである。この両作品への彼の貢献には少なからぬ関心があるが、目下これらを手にできていない。「時代的な磨き」というのは、ベトゥッシの研究者、ルチア・ナディン・バッサーニの読解から得た印象を言葉にしたものである[48]。

セルドナーティのヒューマニストとしての活動は「対抗宗教改革」や「カトリック再興」と称される時代に重なっている。彼の青年期の出来事として、レパントの海戦に言及した。これは、キリスト教ヨーロッパ社会と東方イスラム社会の緊迫した国際関係を端的に表わしている。他方、ヨーロッパ内では宗教上の諸問題が噴出していた。教皇庁のお膝元イタリアではアルプス以北のプロテスタントの影響も顕著で、「異端」や同調者も生まれていた。アルベリコ・チーボの叔母カテリーナ (Caterina. 1501-1557) もそのような一人であった。セルドナーティが同じくまだ若かった時、同郷人のピエトロ・カルネッセッキ (Pietro Carnesecchi. 1508-1567) が異端者として処刑された。それは記憶に残るものになったであろう。セルドナーティがイエズス会士マッフェイの傑作『インディア (インド) 史』の翻訳にどのような経緯から携わることになったのか、現段階では不明である。それはジュンティからの依頼に過ぎず、俗語訳は単に機械的な仕事だったろうか。クルスカ・アカデミーの創立 (1583年) に見られるように、文学に堪えられる俗語純化が顕著に求められる時代であった。トスカーナ語表現にも秀でていたセル

---

[47] Angelo Poliziano, *Detti piacevoli*, a cura di Tiziano Zanato, Roma, 1983. このグィチァルディーニに関しては特に、*Lodovico Guicciardini*. (*Florence 1521-Anvers 1589*), publié par Pierre Jodogne, Louvain, 1991.
[48] Bassani, *op.cit.*,56.

ドナーティが訳者として選出された可能性は高いが、自らの信仰の在りかもまた率直にその任を引き受けさせたに相違ない。それ故に本論題名を「カトリック復興期のヒューマニスト」とした次第である。

後記。小論は、第30回ルネサンス研究会（2007年7月14日、本学）の口頭発表「人文学者・翻訳家フランチェスコ・セルドナーティ」（司会。高津美和）に基づく。

（本学教授）